

手外科温故知新Ⅸ： 手外科を世界に広めた Robert E. Carroll教授とその弟子たち

上 羽 康 夫

日手会名誉会員、医療法人白菊会理事長

手外科の恩師であるニューヨーク・コロンビア大学Robert E. Carroll名誉教授(92歳)は12年前2009年8月16日に他界された(写真1)。その愛弟子である札幌医科大学 石井清一名誉教授(83歳)が本年2021年4月26日に逝去された。お二人が成された偉大な手外科の業績は忘れられることはないであろう。ご両人の業績に深い敬意を表し、ご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。



写真1 Robert E. Carroll教授
(1916.11.7.~2009.8.16.)

I. Dr. Robert E, Carrollの手外科：Dr. Carrollは1916年11月7日マサチューセッツ・フォールリバーで生まれ、イエール大学からイエール医科大学に進学し、1942年に卒業された。軍役の後、マサチューセッツ総合病院で整形外科レジデントとして研修し、その間にDr. Henry Marbleから手外科を学ばれた。1946年ニューヨーク・コロンビア大学附属ニューヨーク整形外科病院に転任された時には当時の著名な手外科医：シカゴのDr. Sumner Koch、Dr. Michael Mason、Dr. Harvey Allen、サン・フランシスコのDr. Sterling Bunnellなどを訪問され、手外科の研鑽を深められた。コロンビア大学整形外科教授に32才で就任されたCarroll先生はニューヨーク整形外科病院で手外科を始められたが、その研究は多岐に亘った。臨床では外傷、先天異常手、キーンバック病などが中心であった。外来では貧富差、性差、年齢差に関係なく親切に対応されたので世界中から数多くの患者が集まって来た。毎週月、水、金曜日の午前に手術があり、内容も多彩であった。病棟回診は毎日あり、金曜日午後4時から整形外科カンファランスで手外科症例の活発な討論が行われた。毎日、夕刻には当日の外来・手術時に撮った写真を整理された。

Dr. Carrollの信条は①手の解剖・生理学の習得、②手外科手技の修得、③良書からの弛まぬ学習、④学習事項の記録と次世代への伝承であった。これらの信条は弟子たちに伝えられ、継承された。同門会が開催する勉強会にはそれが色濃く反映されていた(写真2)。



写真2 Carroll's同門会パネル討論会(キーンベック病):右端はDavid Green、その左隣は上羽康夫。

Ⅱ. 弟子たちの活躍: 1959年Dr. Carrollはアメリカで最初の1年制ハンド・フェロー制度を開設した。最初のハンド・フェローはDr. James M. Hunterであった。彼はシリコンを使ってハンター人工腱を造り、no man's landでの指屈筋腱断裂に対する新対処法を提案した。次は、Dr. James H. Dobynsであり、メイヨー・クリニックから手根不安定症carpal instabilityを提唱した。Dr. James R. Doyleは指屈筋腱鞘の研究を行い、A1~A5の存在を確かめ、指屈筋腱治療に大きな貢献をした。Dr. David Greenは1982年に“Operative Hand Surgery”, Churchill-Livingstone Co.初版を出版し、現在では手外科の世界的名著として知られる“Green's Operative Hand Surgery”の執筆・編纂を整え、世界中に手外科を広めた。Dr. Lawrence H. Schneiderはフィラデルフィアのトーマス・ジェファーソン大学教授としてDr. Hunterと協力し、ハンドセラピストの育成に力を注ぎ、1990年には最初の本格的なハンドセラピー教科書“Rehabilitation of the Hand”, C.V. Mosby Co.を編纂し、医療分野の一つとしてハンドセラピーを確立させた。Dr. Carroll同門会にはその他にも多数の著名な手外科医が居る。アメリカ手外科学会々長を務めたのはDr. James Dobyns、Dr. David Green、Dr. Dean Louis、Dr. William Seitzなどである。

Ⅲ. Carroll's国際ハンド・フェロー (international hand fellow): Dr. Carrollは外国の手外科医の教育にも大きく寄与した。例えば、トルコのDr. Ayan Gulgonen、ドイツのDr. Ulrich Lanz、そして日本の手外科医などである(写真3)。



写真3 イスタンブールにて:左から梁瀬義章(日本)、Prof. R.E. Carroll、William Seitz, Jr.(米国)、Ayan Gulgonen(トルコ)、上羽康夫(日本)。

日本からは田島達也先生や東 暉先生など多くの手外科医がDr. Carrollを訪問されたが、正式に一年間Carroll'sハンド・フェローとして勤務したのは私が最初であった。私は横須賀U.S.海軍病院でインターンを終了した後に京都大学整形外科の副手として働いたが、1962年1月から米国ボストン市民病院にて一般外科レジデント・整形外科フェローの勤務をした後、バルチモア市、ニューヨーク市で整形外科レジデントの修練を終え、1965年7月よりコロンビア・プレスビテリアン医療センターでDr. Carroll's 国際ハンド・フェローとして1年間の手外科研修を受けた。コロンビア・プレスビテリアン医療センターでは、主にDr. Carroll手術の助手、整形外科カンファレンス出席、スライドの整理であった。しかし、ハーレム医療センターでは手外科フェローとして外来診察、手術、病棟回診などの総てを自分で行き、それが手外科修練の主体であった。手術時には整形外科医であり手外科医であったDr. Auther Garns、コロンビア大学形成外科准教授のDr. Francis Symonsと形成外科チーフレジデントが助手を勤めて下さった。種々な症例の診察・手術を経験し、とても有益な1年間であった。特に、整形外科と形成外科の基本手技が学べたのは有り難かった。1966年秋に帰国し、京大整形外科の勤務を始めたが、約1ヶ月経った頃に北大整形外科の石井清一先生から手紙が届き、「アメリカで手外科を学びたいが何処に行くのが最も良いのか教えて欲しい」との内容であった。私は躊躇なくDr. Carrollを推薦した。石井先生はDr. Carroll'sハンド・フェローとして手外科を学ばれ、帰国直後には北大整形外科の手外科を担当されていたが、やがて札幌医大整形外科教授として北海道手外科のリーダーと成られた。1981年には石井先生の後輩であった薄井正道先生(北大・札幌医大)と梁瀬義章先生(京大)のお二人がCarroll'sハンド・フェローとしてニューヨークで手外科を学ばれた。私達は学会でしばしば顔を合わせて親しくなったばかりでなく、切磋琢磨して手外科に励んだ。石井教授と北海道の先生方により手外科の基礎研究は飛躍的に発展したのである。1986年11月3～8日第3回国際手外科学会連合(IFSSH)が東京で開催された。それに引続き11月9～11日にはPost-congress京都学会が開催されたが、Dr. Carrollとその弟子たちは京都学会にも参加し、大いに学会を盛り上げて呉れた。特に、Dr. Hunter やDr. Dobynsは学会発表をして呉れたばかりでなく、司会をも務めて呉れた(写真4)。



写真4 3rd IFSSH Post-congress 京都学会にて：座長 James Hunter & 副座長 Yasuo Ueba。

1991年には私が第35回日本手外科学会を京都で開催し、翌年1992年には石井先生が第36回日本手外科学会を札幌で開催されてDr. Carrollを招待されると彼は大いに喜び、快く特別講演を下された。

1998年石井清一監修「図説 手の臨床」メジカルビュー社が企画された時には札幌医大の先生方に交じって私も著者の一人に加えて頂いた。また、Dr. Carrollの教授退任祝賀会には石井先生と私とは揃ってニューヨークに行き、祝賀会に出席し、同門会の勉強会にも参加した。その後も2人の交流は続いた。2009年Dr. Carrollの逝去が報じられた時には石井先生が当時Carroll'sハンド・フェローとしてニューヨークに居た藤尾圭司先生と連絡を取り、献花と会葬の指示を出して頂いた。令和元年に「手の日」設立を提案した時には石井先生が生田義和先生や加藤博之理事長と協議して「手の日」創設を実現された。彼とはCarroll'sハンド・フェロー仲間としての交友を続けたばかりでなく、心の義兄弟と思って交際していた。石井先生と二人で今後とも力を合わせて日本手外科学会を盛り上げようと語り合っていたのだが(写真5)、登山やスキーなどの運動が好きな石井先生にとってはコロナウイルス禍による外出禁止令は余りにも長過ぎたに違いない。Dr. R.E. Carrollと石井清一先生の遺志を継いで、今後とも我国の手外科を更に前進させたいと願う昨今である。



写真5 札幌にて：石井清一先生(向かって右側) & 上羽康夫(左側)。